

年の長きにわたり強制労働させ、六万近い犠牲者を出させたソ連に対して一件も補償請求されたことを聞かない。帰国時一切の書き物の持ち出しを認めなかったためなのか、在ソ中のアクチーフによる洗脳の結果か、未だに理解に苦しむ次第である。従軍慰安婦問題、中国南京の虐殺問題は未だに国際問題化するのに、六万近い犠牲者をだしたシベリア抑留者の問題については一度も国際問題化しないのは不思議でならない。

多くの犠牲者を出し占領したにもかかわらず、米国は沖繩を日本へ返してくれた。ソ連は一方的に条約を破り進駐した日本固有の領土、齒舞・色丹・国後・択捉の四島を言を左右して返してくれない。ソ連という国に強いいかりを覚えるのは私だけだろうか！

私の青春回顧

滋賀県 山口 馨

おいたち

大正十四（一九二五）年九月六日、農家の二男として生まれる。湖国の北に雄大にそびえる伊吹山を眺めながら幼少期を過ごした。ちょうどそのころ、郷土の出身で民間航空機のパイロットをされていた松井さんが東南アジアだったと思うが、親善飛行の機長をし、見事使命を果されて、全国的に有名になられたのを子供ながら大変誇りに思い、自らも飛行機に憧れた。

小学校を卒業すると、開校されたばかりの各務原陸軍航空技能者養成所を受験、入所した。以後三カ年の教育を受けて卒業したが、そのころ、太平洋戦争の最中であり、大阪の大和川沿に建造された大阪陸軍航空廠へ配属になって二年間勤務する。

入隊

昭和二十（一九四五）年四月全国各地から集った友と共に門司港から輸送船で夜の間に玄界灘を渡航し、朝鮮半島の港に着岸する。行先を知らされず分らないまま長い有蓋列車の旅となり、朝鮮半島を縦断し、満州に入ってからもどんどんと北へ進み、満ソ国境に近いチャムスでようやく下車となった。ここが我等の軍隊生活の場と知った。しかし戦争も敗戦が間近で短い軍隊生活で終った。ソ連の開戦通告の三日後の八月十一日に、我々は倉庫にある衣類を始め、食料品や甘味品などを背囊や雑嚢に詰め込み、奉天（瀋陽）に向ってチャムスを出発し、夜通しの行軍だった。落伍したら満人に袋叩きにあうから隊列から離れないように上官から言われるが、疲れと眠気で必死に歩き続ける。行軍中、道すがらには馬が死んで仰向けになっっているやら、日本の民間人が逃避し、途中動けなくなりうずくまっっている光景を見ると、敗戦の惨めさをつくづくと思う。

八月十五日ハルピン郊外の三棵樹^{サンカジュ}で終戦を迎え、平房にて武装解除、更に徒歩にて梅林捕虜収容所に強制収容される。

シベリアへの第一歩

何しろ六十有余年の長い年月が経過した今、当時のシベリアほけもあつて、抑留生活の辛さだけは忘れられないが、事柄内容には、おぼろげな記憶をたどりつつまとめたので、多少の場所・日時・戦友等について記述の誤りがあるかもしれないが、ご宥^{ゆる}願^{ねが}いたい。私が今も心に強く残っているシベリアの抑留生活は、三つの苦しみ大悪である。①食糧不足による飢餓に耐える ②酷寒におけるノルマ制の労働の辛さ ③民主運動と称する共産主義思想の鼓吹（帰国に影響）であり、この重圧に押しえられて数多くの友が栄養失調による衰弱死や、苛酷な労働で体力は消耗し、異国の地で弔いもなく埋葬された戦友の無念さを感じる。梅林収容所から有蓋貨車で二十日余りの列車行軍を続け、最初に降りたところはハバロフスクか

ら約二百四十キロメートルと言われている「イズベストコーワヤ地区」で、それは寒い寒い明け方だった。町の人たちが我々を見て物珍しそうに寄ってきた。「ヤポンスキー、ヤポンスキー」と言っている声が聞こえる。辺りは白樺・落葉松等視野の限りの木立はすべて落葉し、寒風に幹や枝をふるわせている。列車から見た美しい白壁の建物は、近くで見ると想像に反して粗末なもので、丸太を井桁に組合せた家に白石灰を塗りたくったもので、軒先には一メートルに近いツララが下っている。さすが酷寒のシベリアだ。帰国の望みは断ち切れ、いよいよシベリアでの第一歩の幕舎生活が始まった。軍隊は解体され、抑留者ではあるが集団生活の統制上か、初年兵・古兵・班長の階級制度のまま日常の生活が作られている。食事を始め作業にいたるまで、ソ連の命令が通訳によって日本の統率者に伝えられ、我々の一日の作業が決められていった。早朝の人員点呼には閉口した。収容所に配属された軍人が数えるが、掛算ができ

ないのか五人ずつ縦に並べて数えていくが、何しろ時間がかかり、地表の凍土で足を止めておけない。また毎朝一人か二人幕舎に遺体でいる凄まじさである。食事は高粱や大豆の炊いたのを始め、ソ連特有の黒パンに、山羊の肉をだしに、乾燥馬鈴薯や人参の野菜が僅か入っているスープである。段々と飢えに耐えられなくなってくると、人間の本能が出て、夕食に出る飯盒に分配されたスープが冷えているので、ペーチカの上で温めるのが常習だが、薄暗いので誰ともなく中の具をすくい取るので、飯盒の上を手の平で押さえていなければならぬ。もちろん電気は無く、食事中は当番が白樺の皮を燃して灯りを維持するさまも、一抹の淋しさだ。ある者が、冬道で表面が凍っている馬鈴薯を拾ってきたと思い、ひそかにペーチカの上で焼きだしたら、なんと馬糞であって、皆が大笑いした。

作業はコルホーズ（集団農場）の草むしりや野菜の収穫などもした。ロシア人の囚人なども作業

に来ている。見渡す限り広い農場に呆然としたほ
かは、薪作りや水くみ作業で過ごす。この生活も
二十一年三月ごろまででいよいよ抑留者の厳しい
作業が待っていた。

酷寒の中で作業

共産主義の国だけあって、仕事も体調に相応し
た労働をさせられる。「働かざる者食うべからず」
の主義で、作業にはノルマを作り、強制労働に
従事させられる。一カ月に一回身体検査をロシア
人の女軍医と称する者が我々を裸にして順次検査
する。その検査たるや、お尻の肉や腕の筋肉を握
って、筋肉の付き具合で等級を決めてゆく。一級
二級三級とに振り分けられて、相当した作業を指
示してくる。私も若かったのと、入ソ六カ月足ら
ずで体力も良い方で、いつも一、二級ぐらいまで
に決められる。色々と重労働の仕事をやったが、
特に忘れられないのは穴掘り作業である。大きな
穴を掘り、最後に火薬をしかけて爆破させ、鉄道
線路の路盤用の土を取るための作業である。ノル

マは第一日目は九十センチ、二日目は七十五セン
チ、三日目以降は六十センチの深さに掘らないと
ノルマ一〇〇パーセントにならない。一〇〇パー
セントのノルマを達成しないと黒パン三〇〇グラ
ムにありつけない。夏とはいえ内地とは異なり、
地表から三十センチも掘るとそれからは凍土であ
る。ツルハシやバールでもそのままでは掘れず、
手がしびれるだけである。そこで凍っている土に
薪を燃やして凍土をやわらげて掘り出す。穴の掘
り始めは二メートル角ぐらいで、少し下へ行くと
一メートル角ぐらいになってしまいが、深くなっ
てくると作業も大変で、穴の出入りには両側に両
手と両足をつっぱって上り下りをするが、下の方
に行く土の掘り出しが大変で、隣の友と交替で
長い細木やロープなどにバケツ等を取り付けて、
土を上げる工夫もした。一日の作業が終るとロシ
ア人の監督が長い棒を持って来て、その日の掘っ
た穴の深さを計りノルマが決まる。帰りには我先
にそこそこで薪を拾い集めて穴に掘り込み、火を

つけて明日の作業の能率を少しでも上げること
互いに奔走した。結局一〇〇パーセントの食事に
ありつくために体力を消耗させてしまった悔しい
思い出がある。シベリアの湿地平原に太陽が沈む
ころになると、カンボーイの「ダモイ」の声でス
コップやツルハシを肩にかつき、隊列を組んで収
容所へと帰る。皆一日の重労働で心身共に疲れき
った体で話し合う元気もなく、終戦前の若い勇姿
の面影は消え、ただ背を丸めてロボットが並んで
歩いているさまで、その侘しさは筆舌に表せない。

「地獄で仏に会う」の諺があるが、丁度ある朝作
業に引率されて行く途中に、道路の下にロシア人
の官舎があつて、そこから洗濯物を乾かしながら
鼻唄を歌っている日本人がいた。よく聞き慣れた
声でふと眺めると、何と私と満州の部隊に一緒に
入隊した大の親友の小川君であつた。道路の上か
らオーイ小川かと声を掛けたら、山口かと返事し
た。会いに行くぞと会話しただけでカンボーイが
いるのでそのまま別れた。彼とは一緒にシベリア

に入ったが半年くらいで病気になる収容所で別れ
て以来一年ぶりに異国の地で会えて涙した。その
晩は、決意して夜中にラーゲルを抜け出し小川君
に会いに行った。官舎までは歩いて二十分くらい
かかったと思う。彼は官舎の男衆で、洗濯や食器
洗い、掃除などしている。帰りには黒パン五〇〇
グラムぐらいいもらつて一目散に帰つた。三、四回
くらはは実行して一時の空腹を満たした事も忘れ
られない。彼とは復員後も家族ぐるみで付き合っ
ていたが、残念ながら十五年前に世を去つた。良
き友を亡くしていつときは心痛な思ひだつた。抑
留地の地名などは記憶が乏しいが、とにかく幾つ
かの収容所を転々と歩いた。「ヤクデニア三〇二
収容所を始め、三〇四、三〇八、三二八、四〇一」
と、目的の仕事が終了すると、夕方から「ヤポン
スキーダモイ」と言つては身の回り品を持ち出さ
せ、ホロの付いたトラックに身動きできないくら
いに乗せられて、夜間走り続ける車中の寒さと、
体の自由がとれず小便もたれ流しで、口に言えな

い辛さの移動であった。朝日が昇るころ、目的地の収容所に着くが、物凄く雑草が生い茂っている。先ず収容所の回りや建物の整備をし、地域に關係する作業をする。こうして次々と奥地へ移動して行く抑留者の宿命だった。とうとう私も体力の減退がひどくなり、夜は目が見えなくなり、屋外のトイレに手さぐりで行くが、積んである木材に頭をぶつけ大きな「こぶ」をつくったこともある。また手足の関節が湿気の多い日は特に痛くて箸を握ることも歩行することもままならなくなり、ついにナホトカに近い病院に収容される。医療程度は低かったが、辛い作業をせずに寝ていられたので助かった。二回ダモイの機会を失したが、何としても祖国の土を踏むまでは凍土に骨を埋めまじと、気力で生きた。

ついに本当の「ダモイ」の日がやっと訪れて、二十二年のこの年最後の引揚船高砂丸で、異国の丘で待ち望んだ祖国の土に十月三十日第一歩を下した。

舞鶴上陸後それぞれ友は故郷へ三々五々帰って行ったが、私は帰郷の体力が伴わず、担当医師が八日市に旧陸軍病院があったので入院するよう言われて、一週間ばかり厄介になった。栄養失調の要因なので家庭で食事療養すること約二年。健康回復して以後、織物業を創業し、三十五年間営業する。私の青春は辛苦に耐える人生でしたが、後年は地方議員、農業委員などを勤め、郷土を愛する生きがいある人生ができた。

最後に、飢えと寒さと重労働で異国で亡くなられた同胞のご冥福を心より祈ります。